

再臨信仰の回復を目指して～終末を生きるキリスト者

若井 和生

初めに

「しかり、わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。

(黙示録 22:20)

初代教会のキリスト者たちは主イエスの再臨を待ち望む明確な再臨信仰をもっていました。今日に生きる私たちは再臨よりも地上での事がらに心を奪われてしまうことが多いようです。私たちは終末に生きる主の民として、どのように主のお帰りを待てばよいのでしょうか。終末という時代をどのように生きればよいのでしょうか。どうすれば再臨信仰を取り戻すことができるのでしょうか。

1. 終末という時代について

① 困難な時代

「終わりの日には困難な時代が来ることを、承知していなさい。(IIテモテ 3:1)」

- ・パウロの危機意識
- ・何を愛するか、何を第一とするか、という点における歪み
- ・求められるみことばへの信頼

② 様々な前兆

「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのですか。あなたが来られ、世が終わる時のしるしは、どのようなものですか。(マタイ 24:3)」

- ・いつ起こるのかについて、イエスは何も答えておられない。
- ・終わりの時のしるしについてはお答えになられた。
偽預言者の出現、戦争や戦争のうわさ、飢饉と地震、不法がはびこり多くの人の愛が冷えること。しかし福音が全世界に宣べ伝えられる。
- ・求められる忍耐 (マタイ 24:13)

2. 終末の時代にどのように生きるか

① 最後まで耐え忍ぶ

- ・救われてはいるのに様々な苦しみに直面する私たち。
- ・必要な苦しみを苦しみとして受け止め、そこで主と出会う経験。(ローマ 8 : 26)
- ・永遠の尺度で、地上で出会う苦難を見つめるという視点。
- ・せっかちに答を出そうとしない。無理に納得させようとしない。
- ・試練によって、その人の心の目がどこを見ているかが明かになる。

「それだけではなく、苦難さえも喜んでいきます。それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。(ローマ 5 : 3~5)」

② いつまでも残るものを求める

- ・やがて私たちが神の前に立たされる時、神は私たちの何を見、何を決め手として私たちが神の都に入れてくださるのか。
- ・この世で得た成果、業績、善行等ではない。
- ・「しかし、霊どもがあなたがたに服従することを喜ぶのではなく、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい(ルカ 10 : 20)。」
- ・私たちが地上で求めるべきものは、信じること。裸のまま、罪人のまま、神の恵みにすがること。私たちの喜びの土台を、この恵みの事実置くこと。

「私は裸で母の胎から出てきた。また裸でかしこに帰ろう。主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。(ヨブ 1 : 21)」

③ 主の報いを期待する

- ・報いを求め、報いを必要とする私たち。

・天の父からではなく、人からの報いを求めやすい私たち。
「人に見せるために善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から報いを受けられません。(マタイ 6：1)」

・積極的に天の父の前で生きる生き方を選択する。
「そうすれば、隠れたところで見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。(マタイ 6：4、6、18)」

・行いによって救われることはない。しかし救われた者は行いに励むように勧められている。主はその善に報いてくださる。

「わたしの弟子だからということで、この小さな者たちの一人に一杯の冷たい水でも飲ませる人は、決して報いを失うことはありません。(マタイ 10：42)」

④ ゴールから目を離さない

・パウロはゴールから、そこで与えられる栄冠から目を離さなかった。
「私は勇敢に戦い抜き、走るべき道りを走り終え、信仰を守り通しました。あとは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。(II テモテ 4：7～8)」

・キリスト者は「天の故郷」をもっている。それは地上の「出て来た故郷」より「もっと良い故郷」(ヘブル 11：15～16)

・天の故郷は永住の地、家族団欒の場、私たちの安息の場。

「しかし実際には、彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥となさいませんでした。神が彼らのために都を用意されたのです。(ヘブル 11：16)」

⑤ 神を恐れて生きる

・主の弟子として生きる時に迫害や困難に遭うことは必然。主はこの地上に平和をもたらすためではなく、剣をもたらすために来られた。
(マタイ 10：34)

・信仰者でありながらも人を恐れてしまいやすい私たち。

・「からだを殺しても、たましいを殺せない者たちを恐れてはいけません。むしろ、たましいもからだもゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。(マタイ 10:28)」真に恐れるべき方を恐れない時に、私たちは人を恐れる。

・「人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも、天におられるわたしの父の前で、その人を知らないと言います。(マタイ 10:33)」審判者である神を知り、神の審判の時があることを忘れてはならない。

3. 再臨を待ち望み生きることの幸い

① 未来に開かれる

終末を覚えるということは、終末の完成を目指して前進を続けるということ。約束から成就へ、御国の到来から御国の完成へ、そこには絶えず進展があり、成長があり、改革がある。それは聖霊の御業。教会を整えることは将来の世代に対する決断的行為となる。

② 過去から解放される

過去に捕らわれる私たちの人生は未来に向けて先細っていく。しかし終末を覚えつつ人生を顧みる時に、未来を起点にして現在を見、過去に振り返る聖書的歴史観をもつことができる。

③ 神の定めた時の中で生きることができる

神はご自分の時計をもっておられる。私たちの時計を神の時計に合わせることによって、みこころの道を歩むことができる。

④ 目に見える世界を相対化することができる

終末を生きるキリスト者は目に見える世界の背後に、真の王が治めるもう一つの国があり、神のご計画の中でその神の国が完成することを知っている。それゆえにこの世の国家も王権も支配も絶対ではない。

祈り： 信仰者として目標もなく焦点も定まらないような生き方をしてしまうことがありませんように。多くの困難の中にあって主の到来と御国の完成を待ち望むことができますように。そのためによき備えをなさしてください。